

訳語「人権」の成立について

鄭 英淑

1. はじめに

現在、人間の基本的権利の意味として使用されている「人権」が、いつ、だれによって、使われ始めたかについて、考察してみる。

方法は、最初の用例として認められている、1868年、津田真道の刊本『泰西国法論』（『日本国語大辞典』〔第二版〕による）の用例を基準にして、それが本当に最初の用例なのかについて、その用例の以前と以後の資料を調べて確認し、その上で、「人権」が日本語の中で定着していく過程を考察してみる。

具体的には、①漢籍に「人権」の用例があるかどうかを『漢語大詞典』で調べる。②津田真道の用例が最初なのかについて、津田真道の用例以前の文献を調べて確認する。③②で確認された最初の用例以後の文献を調べ、その定着過程を考察する。

2. 漢籍における使用の有無

【人権】指人身權利和民主權利。包括自由、人身安全、選挙、工作、受教育、集会結社、宗教信仰等權利。朱德《感時》詩之一：“史穢推翻光史冊、人権再鑄重人間”巴金《死去的太阳》五：“我們一定要把正義和人権争到手來。”（『漢語大詞典』）

上記の記述から見ると、「人権」は、漢籍の古典には用例がない。しかも挙げられている用例も、1900年以後¹であることがわかる。1868年、津田真道の『泰西国法論』のものより、後の用例である。『大漢和辞典』には、「人権」の項目がなく、『日本国語大辞典』（第二版）にも、漢籍の用例は載っていない。このことから見ると、「人権」は漢籍に典拠がないことがわかる。

3. 1868年以前の使用

3-1. 政府の文書

この時期の『太政官日誌』を調べたが、「人権」は、出てこなかった。

¹ 朱德（1886～1976）：中国の軍人。辛亥革命当時から革命運動に参加、1927年国共分裂に際して南昌で蜂起、のち毛沢東と共に湖南で紅軍を組織。抗日戦では八路軍総司令。解放後、中華人民共和国国家副主席・全国人民代表大会常務委員長。

巴金（1905～2005）：中国の小説家。本名、李芾甘。四川省の人。フランスに留学。アナーキズムの影響、小市民文学で著名。作「滅亡」「家」「第四病室」「憩園」「寒夜」など。

3-2. 英華・華英における使用（用例なし）²

- 1815～1823 Morrison, R., *A Dictionary of the Chinese Language*
1823～1824 Medhurst, W. H., *Chinese and English Dictionary*
1844 Williams, S. W., *An English and Chinese Vocabulary*
1847～1848 Medhurst, W. H., *English and Chinese Dictionary*
1866～1869 Lobscheid, W., *English and Chinese Vocabulary*

3-3. 各種対訳辞書における使用

- 1810 藤林普山『訳鍵』 用例なし
1814 本木正栄ほか訳『諸厄利亜語林大成』 用例なし
1830 Medhurst, W.H.『英和和英語彙』 用例なし
1854 村上英俊『三語便覧』 用例なし
1854 村上英俊『五方通語』 用例なし
1855～1858 桂川甫周『和蘭字彙』 用例なし
1860 福澤諭吉『増訂華英通語』 用例なし
1862 堀達之助『英和对訳袖珍辞書』 用例なし
1862～1868 Leon Pages『日仏辞書』 用例なし
1864 村上英俊『仏語明要』 用例なし
1866 堀達之助『改正増補英和对訳袖珍辞書』 用例なし
1867 Hepburn, J. C.『和英語林集成』（初版） 用例なし

3-4. 個人の著作における使用

- 1862 加藤弘之『鄰艸』 用例なし
1867 神田孝平訳『経済小学』 用例なし

4. 1868年以後の使用

4-1. 個人の著作および論文における使用

- 1868 津田真道訳、刊本『泰西国法論』

法論の本意は人々をして其自立自主の権を保たしむるに在り、彼国に昔時一切の人権を奪ひて生ながら死人に同じうする刑ありたれども今は廢したり、是法学の一層高きを加へし一証なり（凡例）

下線の「人権」は、稿本では、自立自主の権と、説明されている。この文章は、稿本の「泰西法学要領」のところに出てくるが、「泰西法学要領」は、1863～1865年に書かれ、稿本『泰西国法論』に合綴されたものである。

- 1868 津田真道訳、刊本『泰西国法論』

第十六章 民法の関渉する所左の如し

² 用例なしは、見出し語として用例がないことを表す。

第一 人権 衆庶同生彼此相對して互に其權あり之を人權と云ふ（第一卷、第三編）

上記の第十六章 第一の用例は、稿本『泰西国法論』においては、次のように「身権」になっている。

第十六章 民法の關涉する所左の如し

第一 身権 其条各議あり其身を以て人間に立つ須らく其身の權あるべし之を身權と云ふ ドロワデュペルソン仏、ペルソーンレイキレグッテン蘭（1866、稿本『泰西国法論』）

したがって、ドロワデュペルソン仏、ペルソーンレイキレグッテン蘭は、自立自主の權→身権→人権という過程を経たと見られる。

『泰西国法論』には、「債權」の意味の「人権」も使われている。

1868 津田真道訳、刊本『泰西国法論』

第十五章 その目亦三あり

第一 人権物權の執行、物を取て其所有と為るの類なり、約束の執結、売買を為し物を借り人を雇ひ請負仕事を為し金銀を貸借する類なり（第一卷、第四編）

この文章は、原稿本では次のように書かれている。

第十五章 その目亦三あり

第一 人権物權の執行、物を取て其所有と為るの類なり、約束の執結、売買を為し物を借り人を雇ひ請負仕事を為し金銀を貸借する類なり（第一卷、第四編）

「身権」が債權の意味で使われている。つまり、「人権」が生まれる前に「身権」が使われており、その意味は人間の基本的權利と、債權であった。この「身権」が刊行本において「人権」に代わったのである。そして、債權の意味を持つ「人権」は現在、「債權」に代わっている。

津田真道訳の『泰西国法論』の用例以外は、次のとおりである。

1868 西周訳『万国公法』 「人身上諸權」

1870～1871 西周『百学連環』 「人身上の權人身の權」

1870～1874 箕作麟祥『仏蘭西法律書』 「債權」の意味に当る「人権」

1874 杉亨二「貿易改正論」 人権

1874 島地黙雷『修斉通書』 人権

1875 津田真道「夫婦問權弁」 「債權」の意味に当る「人権」

- 1873～1875 箕作麟祥訳『国際法 一名万国公法』 人権
1875 加藤弘之『国体新論』 人権
1877 福地棲痴「人権ノ辨」 ライトオフペルソン（片仮名は縦書きの左側ルビ）
1880 加藤弘之「天賦人権ナキ論ノ続き」 人権
1883 加藤弘之『人権新説』第三版³ 人権
1887 中川元『雅児棲』 人権
1893 竹越三文「最近十五年間思想の変遷」 人権
1893 竹越三文『個人乎、国家乎』 人権
1893 陸羯南「人権問題」 人権

上記の例を見ると、「人権」ということばは、津田真道が1866年の稿本『泰西国法論』において、仏語 *droit de personne*、蘭語 *persoonlijk-rechten* の訳語に当てた「身権」を、刊本で「人権」に代えることによって生まれた。その当時、「身権」と「人権」は、人間の基本的権利や債権の意味として使われていたのである。特に、人間の基本的権利という意味では、「人権」の他に、「人身上諸権」「人身上の権」「人身の権」も使われていた。この意味の「人権」は、1883年（明治16年）からは本の題目にも使われるようになり、明治20年代以降に用例が増えたことがわかる。

一方、1873年に訳された箕作麟祥の『仏蘭西法律書 訴訟法』においては、「人権」が現在の「債権」の意味で使用されており、1875年、津田真道の「夫婦同権弁」にも同じ「人権」が使われている。しかし、この意味の「人権」は現在使われておらず、人間の基本的権利という意味のみが通用している。

この人間の基本的権利という意味の「人権」が、津田真道によって工夫され、当時の啓蒙者たちの間で用いられたと考えられる。

4-2. 英華・華英における使用

- 1869 斯維爾士維廉士『英華字彙』 用例なし
1883 羅布存徳原著・井上哲次郎訂増『訂増英華字典』
the right of citizen 百姓嘅権、民之権
human laws 人法

4-3. 対訳辞書における使用

- 1872 Hepburn, J.C.『和英語林集成』（第2版） 用例なし
1873 柴田昌吉・子安峻『附音挿図英和字彙』
the right of citizens 人民ノ通義。民権
1873 Zeitworter『独和字典』 用例なし
1877 加藤翠溪・Herrn R. Lehmann 校定『和獨対訳字林』 用例なし
1881 井上哲次郎『哲学字彙』（初版） 用例なし

³ 初版は1882年。

- 1882 柴田昌吉・子安峻『附音挿図英和字彙 二版』
person right 自主権
 the right of citizens 人民ノ通義。民権
- 1884 井上哲次郎『改訂増補哲学字彙』
 personal right 自主権
right of man 人権
- 1884 尺振八『明治英和字典』
 person right 自主権。身権。
right of man 人権
- 1886 Hepburn, J.C.『改正増補和英英和語林集成』 用例なし
- 1912 井上哲次郎『英独仏和哲学字彙』
 personal right 自主権
right of man 人権

1883 年（明治 16 年）からは、「人権」が本の題目にも使われるようになるが、この頃には、専門用語辞書といえる『改訂増補哲学字彙』（1884 年〔明治 17 年〕）に ‘right of man’ の訳語として載っている。一方、現在では ‘personal right’ や ‘right of man’ は、普通に「人権」の意味として通用しているが、当時は、「自主権」や「人権」などに使い分けられていることがわかる。

4-4. 国語辞書における使用

用例なし

4-5. 新聞における使用

- 1879.2.25 「東京曙」 人権蹂躪を詰問
 1896.10.6 「東京日日」 人権
 1901.12 「時事」 人権
 1910.1.23 「東朝」 人権

4-6. 教科書における使用

『国定読本用語総覧』を調べてみたが、「人権」は一例もなかった。

5. おわり

現在「人権」は、人間の基本的権利という意味で通用しているが、最初のころは、「債権」の意味としても使われていた。両方の最初の用例は、津田真道の 1868 年の『泰西国法論』に出てくるが、「債権」の意味の「人権」は、現在「債権」に代わって使われなくなり、人間の基本的権利という意味の「人権」のみが生き残っている。

人間の基本的権利という意味の「人権」は、津田真道が、仏語 *droit de personne*、蘭語 *persoonlijk-rechten* の訳語として作り出したもので、1868 年の『泰西国法論』において初めて使用している。しかし、彼は 1863～1865 年の『泰西法学要領』では、上記の原語を

「自立自主の権」と理解しており、1866年の稿本『泰西国法論』では、「身権」を当てている。つまり、「人権」は、「自立自主の権」「身権」という過程を経て生まれたものといえる。

「人権」が生まれる前に使われていた「身権」は、1884年の尺振八『明治英和字典』に、見出し語として載っているが、今は死語となった。

津田真道によって生み出された「人権」は、1883年（明治16年）からは、本の題目にも使われるようになり、1884年（明治17年）には、専門用語辞書である『改訂増補哲学字彙』と尺振八の『明治英和字典』にも載る。明治20年代以後からは、用例も増える。しかし、1900年までの国語辞書には載っていない。

専門用語のため、一般辞書には載っていないと思うが、学者の間では遅くとも明治20年代には、一般化していたと思う。